ここ野津田の地にもようやく秋の装いが色濃くなってまいりました。本日、本校創立五十周年記念式典を挙行了しましたところ、このように多くのご来賓のご臨席を賜り、誠にありがたく心より厚く御礼申し上げます。

本校は昭和四十九年十一月一日に設立が許可され、普通科十学級でスタートしました。その後、社会情勢の変化に伴い、学科改変を繰り返し、現在は普通科、福祉科、体育科の3学科を設置する、特色ある都立高校として現在に至っています。この間、一万二千三百人を超える有為な人材を、社会に送り出してまいりました。

さて、五十年前といえば、読売巨人軍の長嶋茂雄さんが、後樂園球場の引退セレモニーで「わが巨人軍は永久に不滅です」と言葉を残した年です。五十年の年月が過ぎ去った今日は、複雑で予測困難な状況となっています。さらに、少子高齢化の進展、労働力の不足、地球の温暖化など、これまでの社会構造を大きく変えなくてはならないほど、社会的・経済的な課題が深刻化しています。予測困難な時代だからこそ、本校の教育目標の一つにある「未見の我」を発見していかなければなりません。未見の我とは「未だ出会ったことのない自分。試練を経て、成長した先にいる新たな自分」であり、新たな自分を発見するためには、何事にも本気で取り組まないと気づくことができません。恥ずかしがらずに、努力を惜しまず、継続することができれば、新たな自分に必ず気づき、本当の実力も身につけることができます。大きな目標や将来の夢でなくても、今したいことで構いません。授業で学んだことでも、部活動でも、アルバイトでも、自分が興味を持ったものならば、誰に言われなくても行動していませんか。アメリカの起業家であり、著名な作家でもあるジム・ローン氏は、「学びを知識に変えるのではなく、学びを行動へつなげましょう。」と述べています。自分が興味を持ったものに関連した「好きなものや嫌いなもの」に触れ、多面的に物事を捉えるようになれば、自分と違う考えがあることに気がきます。学びを「何かを調べました、覚えました。」で終わらせずに、関心と疑問を持ち、自ら考え判断し、一つの答えが正しいと決めつけず、他者と協力しながら挑戦し行動する力が、これからは必要とされています。

今年の体育祭は雨で中止になりましたが、私は昨年度の体育祭で、大縄跳びを飛び続けていたクラスに向けて、全校生徒が応援していた光景を今でも思い出します。失敗を繰り返し、勝つための戦法を考え、練習を重ねてきた全生徒の色々な思いが折り重なった、全生徒の応援する姿に、とても感動しました。冒頭に話した長嶋さんが誇れる点を聞かれた際「選手として勝ち取ったいくつものトロフィーや記録の更新ではなく、反骨心だ」そうです。新たな自分に成長させる原動力。失敗への反骨心を持っていたことを誇りに思うそうです。あの時の大縄跳びも勝ち負けではなく、頑張ってきた自分をみんなが褒めたたえていた瞬間でした。今ここにいる生徒の皆さんが、自分を褒め、誇りを持ち、野津田生で本当に良かったと感じることができていれば、私もうれしいです。そして、これからの野津田高校を創っていくのは在籍している皆さんです。「未見の我」の発見と共通する「誇れる自分」を持つために、充実した高校生活を満喫し、何事にも主体的な行動と他人への思いやりと感謝の心を持ち、確かな学力・規範意識を身につけ、社会に巣立って行ってほしいと願っています。そして、「未見の我」を野津田の伝統として受け継いでいってください。

創立五十周年、今日という日は通過点ではなく、次の飛躍を誓う新たな出発点です。教職員が一丸となって、生徒の成長のために努め、真に、地域に信頼され誇りとされる高校として、より一層の努力を重ねる所存でございます。そしてご来賓の皆様や保護者・地域の皆様方には、どうか、いつまでも本校を暖かく見守っていただきますよう心からお願い申し上げます。

最後に、御多忙にも関わらず記念誌発刊にあたり、玉稿をお寄せいただいた皆様に、心より御礼申し上げますとともに、これまで本校の教育活動にご支援とご協力をいただきありがとうございました地域の皆様、保護者の皆様、業務多忙の中、教職員と生徒が記念誌の編集をはじめ、周年行事の準備に尽力してくれたことに感謝し、野津田高校がさらに飛躍することを祈念して式辞とさせていただきます。

令和六年十一月一日

東京都立野津田高等学校長 高柳 勝彦